

シンポジウム 東アジアにおける亡命(1933-1945)

2010 年 9 月 17～18 日

場所:ゲーテ・インスティテュート・ヤーパン・東京/学習院大学

<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~20012491/index.html>

東アジアにおける、ヨーロッパからの(主にユダヤ人の)亡命を扱った研究の多くは、近年とりわけ、上海におけるユダヤ人亡命者の問題に取り組んできた。これに対し、日本における亡命に関しては、いくつかの政治学的研究はあるものの、未だ十分な研究がなされていない。現在計画中のシンポジウムでは、この、亡命研究分野の空白を埋めることを目的としている。更には、東アジアにおける亡命(おもに中国、特に上海と、日本の植民地であった満州、朝鮮半島、および日本)を単一のコンテキストにおいて考察したい。それによって、ある特定の地域や都市に限定した個別研究からは抜け落ちてしまう、包括的な問題を取り扱うことができるであろう。シンポジウムは以下の三つのテーマに焦点を合わせたい。

1. 東アジアへの亡命の基本条件
2. 東アジアにおける亡命(体験)を綴った、文化的テキスト
3. 亡命をめぐる、間文化的(inter-/transcultural)な関連性の諸相

テーマ1に関して

東アジアへの亡命の、政治的、文化的、イデオロギー的、経済的枠組みに関しては、以下のようなテーマが考えられる。

- ・ヨーロッパの国家社会主義国(およびその統治地域)における移民法と、通過地点となった国や亡命先の国における入国条件
- ・亡命のルート:ヨーロッパからの亡命者はどのようなルートを取ることができたか。また、旅券やビザの条件はどうなっていたのか。
- ・日本人の、ユダヤ人亡命者に対する態度:日本における反ユダヤ主義と親ユダヤ主義。
- ・日本支配下の上海への亡命。
- ・中国(特に満州国)への亡命。

テーマ2に関して

最近の亡命研究は、亡命という現象を、カルチャースタディーで盛んに議論されてい

るテーマ、「文化的交雑(ハイブリッド化)」と結び付けて論じている。また、亡命によって生じた文化的二重空間で発揮された、創造的ポテンシャルにも関心が寄せられている。この研究視点と関連して、東アジアにおける亡命(体験)を綴った文化的テキストを取り扱いたい。おもな対象となるのは、文学的、哲学的、文化学的テキストだが、その他、絵画や建築なども考察の対象となりうる。考えられうる研究テーマとしては以下のようなものがある。

- ・著名な日本への亡命者(カール・レーヴィット、クルト・シンガー、ブルーノ・タウト、クラウス・プリングスハイムなど)の著作、ただし、無名の作者によるテキストも研究対象となりうる。
- ・東アジア全域における、亡命者の文化的活動(たとえば、上海におけるユダヤ人音楽家の活動や、ユダヤ人亡命者の文化生活)
- ・上海で発行されたドイツ語新聞(Gelbe Post など)

テーマ3 に関して

「亡命」という事態は、しばしば、西洋的(聖書的)メタファーと関連付けられてきた。東アジアにおける(西洋人の)亡命を扱う際には、もちろん、東洋的な亡命のメタファーや、その文化的背景も考察の対象としなければならないだろう。それによって、亡命という現象をめぐる間文化的(inter-/transcultural)な諸関係を明らかにすることができるのではないだろうか。ここで考えられうる研究テーマとしては以下のようなものがある。

- ・東アジアの神話や文学において「亡命」はどのように取り扱われているか。(日本や中国における「追放」の伝統、歴史。)
- ・戦時中における、東アジアからの(アジア人)亡命者。

主催:

科学研究費補助金(基盤研究 C 20520302)

ゲーテ・インスティトゥート・ヤーパン・東京

「東アジアにおける亡命」研究グループ

研究グループの責任者:

Prof. Dr. Thomas Pekar(学習院大学)

thomas.pekar@gakushuin.ac.jp